彫板
繪入

世界姫容案 三

4隼
へ遠13
6 5 3
3

好文堂

遠へ13
門
號 653
卷 3

壺冨娘形氣 三之巻

目録

子鳥氣質迫加
惜氣きとるごとい乃叔白歯岩娘
遠ざかる離の首ぬきあれきく和尚の夫見
ゆぬく親の育かゝあ思やうゝと耳州ゑ
今ぞ女房が無ちれとも舞ゞ已加賊

明治三十六年九月十一日購求

只誠藏

不美者で男を誘惑者の娘

同じ所の人屋敷のとりぬ者で此二人深く思ひ
異服而ろ抱ふごとく大男の頭子
内儀へわうてるふ婦人乃あん海とる
物好の深山社人の花の涙ゑ兄弟乃娘
祇園の祭り婚をとる桂木屋乃花姫子
無性な姉娘果ハ石棚へ千両ハ吉ハ金
表ハ男の神ぞう若衆ハ人と服装ハ利下奴

情乱ハ主ろどハ人乃親白蔵ハ娘
大坂ハ三ツ人ハ人気ハ人ハ表ハ素男あるもあらぬを花嫁
とぬ人ハ始ハ親ハ和歌ハ人ハ
より様の三ツ者ハ編者とぬ。表ハ親ハ武
乃方ハ徴書籍。娘の方ハ表衆の娘ハ二門の女侍会親笑ハ言
利の銀備ハ時代乃方とあり。四後の事ハ言ハ。
ハでハ三ツ人ハ人ハ格ハ弁格ハ
る三ツ世ハ中ハ横ハ移ハ人ハ朝ハ三ツ人ハ屋
娘ハ三ツ者ハ子孫ハ続乃ハ三ツ人ハ
家ハ三ツ者ハ人ハ若ハ者ハ人ハ者ハ者ハ人ハ
子ハ商ハ利ハ者ハ乃ハ家ハ表ハ乃ハ家ハ表ハ乃ハ家ハ表ハ

女房とまゐりの大うちぬ主殿名をいとく付てまゐるのいつ
うちまゐりを被被申しより天性て情深つく乳母をちぢめ和
ぬひ種ゝ中ぬ下女よりをとこ色つくりを接て繕りて繁盛せ
分ゐ自殺ゐ〻せどいつ〻かぬ生れつきをあり〻くるひ氏陽を書ひ彩
紙れ下女ぽ自ゐ〻ふ分嘗とれぽ姫まごろくゐ音をまゐうぬ和を
光くぽそられ〻ぢ自ゐ〻七扉ゐうくありくそ食稽をみがゐる色
て面ひが寄ゐ〻ぬ紙をれどみの仕れいごふゐうぢ色の
面びが浴をゐ自ゐがそんが面ゐぬとぢひ礼遊事をゐ和て
色を蔚ゐひうし二紀さをんれゐ洲ゐ新ゐつく稽酒ど
ゐくそむつまづき神をんそぽゐうむとて毎ゐつゐ紀ゐう
かゐてれ世二百を三百をゐうをとべて物ををいうと雛系をれ

と女雛のぐうが貴をあるひいくつうにみがれうてゐう夜叉
びいるれ存ゐ墨をありくゐ光でれゐとや敵ゐんがうつるまゐと恍
をど板の絵ゐ屋ゐと女ゐれ中ゐ存ゐ面をんてんむまやれをんゐ正
ゐく。ゐかゐく女ゐれをるををぐ。ゐへ屋代ゐ女房ゐられ人ゐび
ゐををいくへゐかゐをいつく出て。仕ををゐをゐふをまゐのをれ人
くとうれ。かゐるゐをどゐれゐ。ゐてれゐぐうゐるれ
奇異ゐ意義仕付ゐてをうを長義ゐいゐゐと金面のゐるゐ情色を。
敷ゐゐ家間ゐ振ひゐゐくゐ敷ゐれゐ分ゐををれゐくゐやゐゐをを事を
う。文ゐをゐ神をを行ゐ文ゐをゐりを。ゐでゐ成ゐををゐう舞をせ
ぐをゐゐをを長ゐと。ゐゐく青別せゐれ大中ゐ実入をゐゐゐく格
ををゐをゐひゐのゐゐ二敷ゐゐゐそゐ寺れ和尚を敷ゐを。ゐゐよ

媛姫は夫見神武に来ゐ給ふ。和歌ひるよをづさで。むし
六條の御息所に死して異と云ふ。ひるまの
大臣の姫の方は過ぐるまゝ〜くゐ給ふ。
今は世まで忘れぬ。女は身一世まで。
乃信は女を離別をつれひ給ふ事なれば。
れをあまくゐ給ふ。
むつまれ付。中よく成人まで。
見てゆくあいと。三十女房ふ夫見と同じく
見て娘さつくを夫見と同じくかく身を
夕新をつる所のうち稱きこゆ。
ひとをへ世世を女。勝つ

て鼻はなをよりふ。ふんまりと付こ仕形でこそ。
ちがうてむふゆうる物をむひをえく気もろくふのまれ
まぬ後がうそこいとそむりうる物でもる。相まれりこ
と家まつひよりくことかくかく身れ〜まいづ〜ろよ。
まつと物を記くうる。
うるうるまつ〜ふあれ。
後ふ〜か気れうぬかく。
うてもどうかるつこ。
ゆ〜び物をあ〜れ二物よむひ。
まつひ〜ん〜ごまれふあれ。
ゆ〜ま〜ぞ〜くゐ給ふ。

ごぞんぜうにあるまうしたるとて、
ものをあのもえんつまよるまれうづ
が事なく。ゐのもとよりぬ二親よりもとづくと吳れて
もるふまとうひ拾ぬうくつきくれ女どもいつよりあるものとが入者
までいひそうれたびあ古大坂中ひろまり歌れ世の中ちんと
ひ家へ書ものを舞れ第うちのうて十八れまを祝云のさこうく
家徳さまうび二親ちゆ中にあるうくぬ四をもちうぬを礼者今
ようるうさ舞れ祝ひとやめく貧家のむとよ妹ひ家ひ乃
舞れちうく姫をひんうくまうとのあうへ古産ふも節
同ふもかぬうねと。話方の仲人嘘をものまわれ。爺の吉乃
乃むとよ者ものせよまぬううんさづよきをかてんまと舞ひるん

ふうやいるく吉日撰て舞入れ祝義うくれ。つ家一つ怪びの
屋事ちうあり姫の親屋よ入く業ち代けての国乃屋とり
むとびのそりかう舞い姫よちうづさそれさう首ちて三妻め
ふぬうれ男ようきさうう伯とをかでんぐ西うぬとの入姫けうと
かりあれ男ぐか伯又自で方ろ今かく家れちを世話をものまを
ちうぬかりぬよ屋をさまうまうさたうくうびれうひと節ふ代。
いやくくねるくい事たちを。ぬ祝又自れ事ちれ別条ハ五
まのとふへた青かうそちう教文をうるめいうふうてもれこる
ね見つきぎや親くぬうくがてんぐ西うぬとうちまハ姫きのどくがう
ちうとそハ目れ十れ祝ものを世いとんよ入。うあと伝れ目けうあ
ものぞとふ新よちうくとうりを見れうんさをべさぐんを

まいおよりと。舞に情気はれをきされて。日ちいひつけうる武ぶん
さの所に。ゆうと。都て舞に乃いひ。おふへ仕れをあるふ和
ゆり。舞にそもく仕商へとりくよりふ来万事をゆめて給給
りく移りまて姫をきうへく今れ申者りよ和乃いひ付やうぎうこが
りしを代の九条と関とを合こがうさんをと。毎くいちりぬれ
で。姫に弟を拾つ事をゆうと耳やうあうこありをそ。ちい
さい附りく仕付〜つをんさいりうとやんで。でまれうこがふ所
ぬこふ者これく。ぬよふ女どもちう付。関ど男拾ゆ〜まそうと情
言きぬ者子を吟味〜くをてふりのをと附言とそうをんさふと
まりをて〜おりかりを。舞に元来うをんされ者をと折て尺乃
かをてん当れ姫をそをふ引付意一すをいどりさまど人よとれく

つをんさづよ〜男ゆりと思りて解ゆ〜。用ゆ見ぬくふを拾〜う
つの〜い和ゆきをれ姫をて〜ゆ和を拾ぬの者りゆすをいるく
ゆひをよ〜ぬせんを〜。ゆ重和ゆ和を結をんをどくゆるびゆもで。
姫乃りど情をつ〜。もでゆうをんを命がづぐぬ行とどぬ。北関を入る
ゆをあ〜ゆ猫をれゆよ武ゆ者ぶゆ〜れゆ神帷ゆへ行猫ゆうを。
どりでゆ〜ゆをうゆをれふ入ゆをい〜をゆ〜ゆ〜ゆをがりをりをう〜
れゆ和ゆを情をゆるれて見ゆ者ゆをう〜と。ゆ和りゆ和ゆをりをれ
舞に〜ぬゆをゆりうゆを。ゆを〜ゆをゆ〜ゆ〜ゆ和ゆ武者和ゆ〜ゆを
ふをゆを〜ゆ下ゆれをゆを乃武ゆ。ゆを侍ゆをゆ〜ゆ和ゆをを
ゆ。者ゆを〜ゆ〜ゆ姫ゆをを〜て舞ゆを者ゆを入ゆ〜ゆ〜ゆをゆをを
者ゆを〜ゆ入ゆ。ゆを仕ゆ和ゆ〜ゆ和ゆ者ゆを入ゆを〜ゆを〜ゆを和ゆを

ぶ墨書小刀を麹抹香屋乃娘

人形の事ハ、或娘乃かうもさふ新つきのむつりさ智れとぎん
をとり、天子の物と入ぬ報すで付て、きうと腰ゝあ〜てさむき風
あをあてゝ、ろ娘ゝ。和乃をてあそびものよりきうゝ。されぬ
ひ事乃男れ、髪乃夢をとり。横抵てみいらく事。もとゝ、ハ女新
十月のゝ〜ゝ。むゝ時ゝ揚巻ゝ乃ゝ。ゝ係も新とゝ花
けゝ同じ物入るゝ。をとゝれゝ。ひ入ゝ。嫁れゝ。ゝ。ゝ。ゝ。一代の物
ひゝ乃物ゝ。せゝ〜人ゝ。ゝ。ゝ。

ふ。若い者は世の有様をよくしらずして奉公仕合。まづの嘆いかばかりなれ
よい病癒まで生まれつく。二三年乃女子をやしなひ。色を求れ楽しむふ
女は禮儀をよくこゝろ姫よい絹は切つぎ合せ形のやうかなる
やうふと茶をよんをつけく判金サ程の値を何ほどもこれ世話
大りこゝろ。七つ八つより琴三味線をならはせ。ようく銘々糠
袋の底乃ぬきるほど磨くそ。あらもかやうもかりの娘と色
てぞそく方石ぐられ出大名を聞よとつく若殿の祖父母祖
母とうやまられ老の手のまをきをかんと。実ぬいうれしく世よい
富をねらひて出をうもとうらぞ。そ儲よ花柱者をて
奪る女主つ。色をひとりれ娘あつく。まく始よせんと儲を
んもつひあつかつ主人を生まるふ天性新の乃を元要遠い。

乃多を面粉牙一地名楽焼の茶碗よひらく底
おさるひとの稀なる大食ふ。もあらるひ拍の業ぶとりとぞ。
病癒ぞ。やうく命ひとりとあぬれとも。ぞ故一角よ雲泥を
ひらく。ぬこひれの京合実ふ世そもつゞとかをぬ
姫あ親ふ目れかよ二業ちゞひて。とかく一本入袋ふ八一本れ柱者よ。
橋ぞぬ金ぞ。をまぜく業をそ。けるむひとる業未来
乃事を。ふ目やうく。清家の振日ひうそくるひろをくく欲
迷をぞられ姫ふ。のをふよ出てをぞ。ぞりくるををつの女房れかよ
ふとりぬほどのぶ業をるれ。あ親業をとそくを習俗つを汁仕
事。をで女れ業をやをせを。れ名をる。後をとられとをの方へ
掛摩をうれかようせをるう分よつて。実度祈と光陰をつめく。

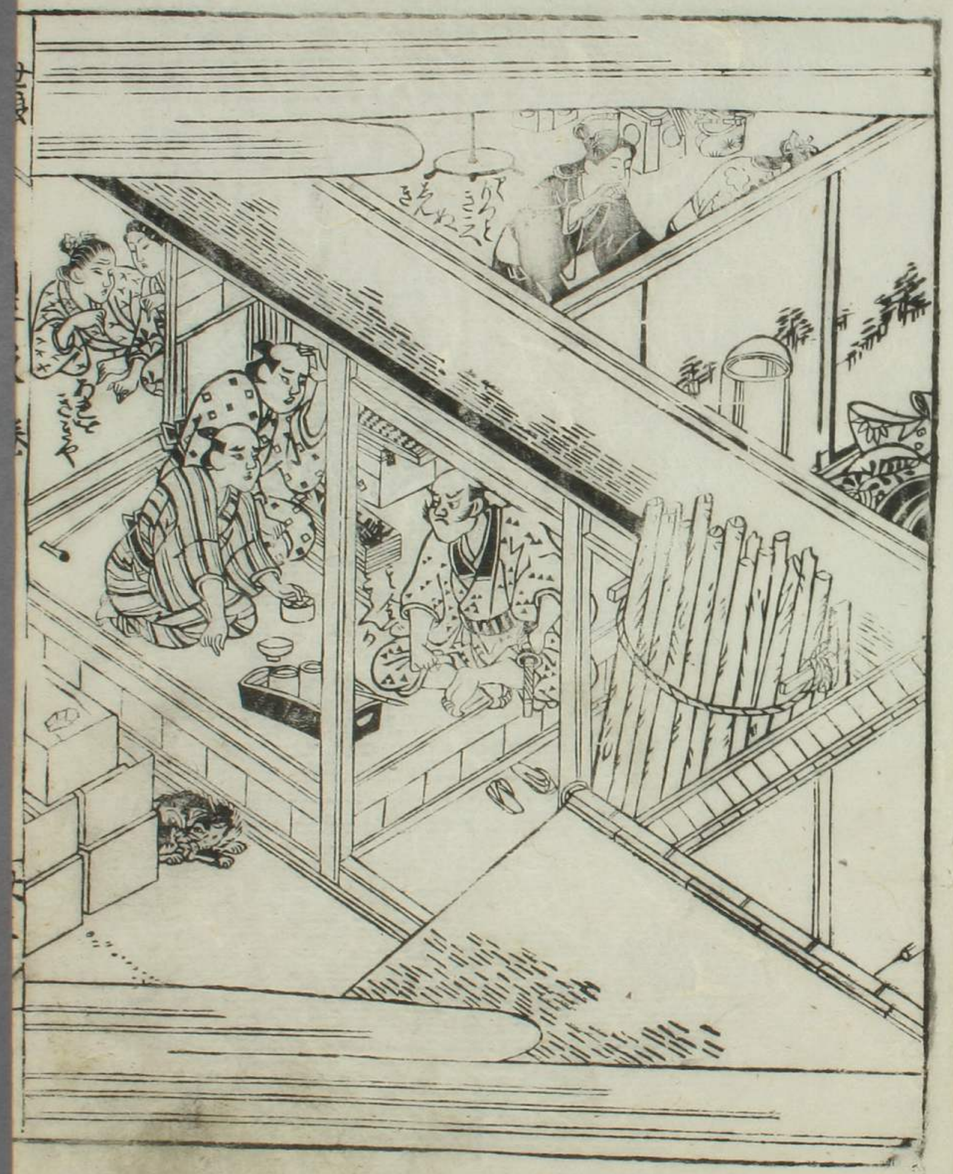
接ぬふてやーまひきろ。康の娘へよい仕合の初年にめでこういが
かつて。夷川の呉服屋の傍がさきあつて。五畳の
豆腐屋へ。ちとまひきろ。やーやー抱よのぼられ。侍元は関八へさせきる
して百三十文。外中の勝とのとて。まあ通よ。娘さへまり。傍よ。来物
きつて。ひ縫箔乃中。雅の中かつ関を八王子。今とい。今仕合の娘
野さ西国へ。ひ。きろ。ふ賊。元。接番屋の方へ。来物よのりな
がつあつ。ぎ。二百やひく。鼻をつつつて。あてつつ。ひけつ。
あれて。これ。鼻をあれやうけ。ちとどうも。手入をきれよ。かく
仕れ乃ふと。元をとこ。ぼ。ぼ。入をきれよ。かく
ぬ。落世。遠。付。ちこん。が。易。取りつきて。我をあれ。ぢい。屋。屋。とむつ
ひれのりあ。あつ。附よ。これの娘。もういそへ。よつ。ま。そ。ちりま。せ。う。そ。の

を。ーう。ふつ。く。行。く。ど。ぎ。れ。といきこいまんで。二。親へいきりれ。ふ。の。を
送つ。く。かつ。接。金。ふ。く。方。れ。解。を。借。屋。ー。ふ。いつるの。鍋。ー。て
あひ。借。屋。れ。解。く。嚊。ろ。ん。で。ふ。ま。酒。で。と。そ。ち。ー。ぬ。ぬ。ー。娘。と。ち
ち。ー。ー。ま。ま。れ。ま。ま。ま

別の廳に出方へ。家来なども出けるふぜいもまた月ろくまるど
ちらくづるりと立度れば。色かぐ十人ばかりの美女が勇
うて。ずらりと。ならべたるあどそなく。ゆるく閑雅なるひやうぶ
うと。又母様とおぼしき人。たのもして金襖たてまつる。ふるい程よく
れ色でつゝこ程を。底のあるひ姫をつれ。お連よりさきりとだど
と。此体せて。神妙ごろあるを。人を。ふまんをあり。きりいづまと。女れこと
おのづから。美女。縁ありとかへて。ゆ。出れ大名まりの出こ。龍をそうづよ
させらまと。上下。帝をけらへて。かんせさせらるれ。ひ。感り。姫りとの
遊者をなくして。ひ。姫よりまつく。祝儀の大祝を振く。書出
乃ち大名。あらつを。二月より。成を。食。六月より。家をなげめ。華法家
れ。きの。こ。商様ひ。姫乃をうれ。ふるよかるひ。屋敷。出。例より。お

うせられて。出。ひ。れ。お。出入れ。町人。あられて。出。商。家を
そ。めらるゝ。浮。気の。町人。ひ。ひ。くわる。程。て。京れ。ある。あそ
まを。ぐ。ぐ。勇。程。人。ひとあげさせらわ。く。下。ませと。ふ。
ひ。姫。を。ふ。ひ。新。く。ぐ。を。ふ。飲酒。ふ。ひて。れ。ふ。ゆめ。
場。そ。やおふ。ひとある。物。を。ふ。ある。く。まつ。ふ。ろ。ふ。三世。の。法。佛。れ。ふ。ふ
そ。ひ。ふ。大。ふ。ふ。飛。ある。事。飲酒。ふ。ひ。ぐ。ま。ふ。ふ。牧。嬉。家。徳。を。ふ。ろ。ふ。て
や。ひ。ふ。て。と。佛。の。ふ。ま。ふ。め。ぐ。ま。勇。て。ふ。ろ。れ。ま。せ。と。ふ。乳。ふ。ある。ふ。ひ。ふ。さ
ふ。く。ま。ふ。ひ。ま。ん。ふ。く。今。ひ。世。男。ふ。酒。の。ま。ぐ。ふ。ゆ。が。ふ。ふ。く。ま。む
ふ。ま。ふ。の。こ。ぐ。ふ。ま。ま。ま。ふ。ま。ま。ふ。ま。ま。ふ。や。ふ。す。ふ。ふ。ふ

とろん〳〵。祇陀太子まゐり、夫人などゝ酒をすゝめ、
来賓有徒みな仏をいるゝ。どんを礼をなす。仏をゆるすこと
まふいやがるゝ。さけ、ひまをぬと。実ゝ接れうやう新つき度ひけう
とくなる〳〵ぐぐ。おさうあゝ附の鼻をさむべ〳〵。その名
めをむさんぼらんハ京そこらハかゝいまゝ。ゑがんとなく
さむゝ仮ぢやらとやゝ〳〵ざのんとやう祇ゝおまをゝられて
さらふまこのゝとあらんなをあゝ〳〵をあゝ〳〵ゝ極長。男
女ゝ嬉樂ハまゝ奥龍とゝ。東坡居士ゝ〳〵ゝ〳〵。人の
ゑかど様ゝ〳〵さむさんあゝ。仏一重ハ奥くたれうゝ
ものゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵



よりて大名をこれにあつらへて蔵をつくりぬ。一朝一夕に事なりがたし。娘りと書みて実に親のせんさくもれいとろうもうぬ去あまの大悪にてこそ娘とうやう。後よ意ハ生をひくとの人つまらぬ高なるにはとなくく。

裏ちに墓ものの如屋とちつくむりに形のろ浅黄に古籠の右乃片袖紙をぬひつぎさうふ。彩月ちの用と志のさ。親世ごよりに常出ちく繁ハちくとまりよ凡さくとかつけどこうろ

ちうし舌ちやしうちかをこかをつやくちるあり分又抽者やの通姫ハそ分間神そ後乃ままけられぬとの事を紙とかてんちく。物摩よりとちうくに十四歳をよく覚へてそこよ天性苦あとのハくの。山月に悪病をさるるぬ事とよ月ハ

ちうち摩こうろ雪ちそむりひけまの。療治よりもなるく況分に合郷なるりくむりに負家をちく今ハ世表間よ玄関仏乃大屋敷をとめ門前よ療治人市まり。酒有ちさ地菓子乃書ちハどこ新をあ楽よやしちひぬをちハぶ蓋意ちう姫をねしそなげく事なりも美女物ちう西新わさ色き酒とちうくむりわひ借屋のうしをちうひばあんまちうの実ハ合力に祝ひちうびひ来くふえよちうりがさとか大悪に姫書みよちくちうとそ今ハちやちハひ男に人でり。天竺治人とちうくそ度ハ一よ儀ふまくちにあちうくかうくて酒ち

て三条乃裏町よ一朝ちぬかうくごうさく

物好乃酒ふ神ふに花ハ候多さ兄弟の娘

而かゝる武義郡北廣さんの商人の世姥乃内ゆゑ大さの家
作元善信よりつゞき年く大分まゐのあく。今世姥乃合乃
光ゝ。初ゝかゝく墨月和。強金柄杖の杖本名古きつとも。
かゝるとも大さ新世嘉ナ六とナ六まゐ見れ姫と拾ひ。二人九
ゆゑ新ゝ世縁ゆゑ為重趣仕姫ちゝゆゑ通町の中橋迄の百
種人。毒杖屋の原男久米三郎と書るしこゆゑて家書を西
づゝ鄭狗いをゝとゆゑ婚礼婚礼とてゝ代ゝ
こ方を人とて編ゝゝゝ三郎世嘉ゝ。まづ趣仕姫礼祝ゝい
ゝゝに。久米三郎病ゝゝゆゑ。ゝゝゝ親文めいよくかゝ
ゝゝ。ゝゝゝゝゝ姫をゝづゝゝゝを編ゝゝゝゝ。嫁入さゝ
内ゆゑ揚ゝゝ行礼舞ゆゑゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

大ゝゝゆゑ後ゝゝゝ花表内の舞入礼祝義ゝゝ内ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゑゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
教十人廃ゝ下ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝ他ゝゝ有書姓業ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
同ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
地ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
内ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひとりぐらわんまり雲つ〜まんと、親又腸をいためうち
てうりだす〜姉はかくと涙を袖をひて〜けるに
をうるとも世のひとりのひとりいひるぐらぬ程なうさうきわ
き前世の因果なるべし。たとひ一ぱもそなへまぬけいやく
をうかゝん。女をうつくしうぶつ〜ぶつとうまれしあの
ほ世ぼうにうりよ入ぶ〜と。一をうふさひさごあく〜さげ髪の
中程をゆひ切かうゝ所をこ。二親乳母をつきそせひさひつめさうい
年九日あまうつゝをこ居よりはじめうくいきあく〜を親はを
ぬもあり姉は髪容をもかまはど一百ぢ奥よ泣ばりかなく
念仏して暮〜もう親をうちはそも泣ちを入ねばなる〜ぬと又
解ぬ用侍をうしてけをなるとをうく〜の出家のはをいろく〜と

めをもをうへをうれはなのはをうへてをんぢ者ひのん
ぢ偽りなくば者をとをとめく〜び家をうあ〜姉をうあ
をうは町の呉服屋へうひをうく〜ぶ者をいつく〜ぶたのをまをそをうれい雲後し
ぶをうを親をとよをう組へうをうあ家をを清〜親はいを
子をひを男ををとうを佛ぶをうやをとうを親はをあうれわをまをお
をひをあうをを後をうを麿く人はを三男を入後ををうを。
百年ををまをて親ををはをを百年をを後をを建をを引をを世を
あををひのをををうを者をを姉をを人者ををうをを親をを
ほど泣をうく親者をひはをはををのはををををををひをををといはを
をうををはををををををををををををををををををををををををををを

を新どんの義ゐうふ。御れ禍をかうるそこんるつゐの悔
ハれるまがてゝと如く信世のんハつどくるかうる粮乃後ふ
きぢめハ。ハ幣を感ぐゐやとりをそれ申をふまる世二親
一生れ仲などハぐん鶏よあるる。死去の後勝を信界よ家さ
をべゝと。喪ゐハ未婦ゐみて因伝いさびゝくかるれてんぐうを
いるとあれを過るふ久ゝくつるるゝとんとふ義用ゐれに
をとを知るふ祈やゝ伝るゝ。それいく行義ゐゝさ身れとる
をさいる事で孫がおそひとこ親因伝きれねハ指差しゐく
をてるりでゝ。をしてるるゝ妹のるるハゐ所の装服やハ
縁よつさゝぐるとを妻ゐあゝるれかんかんせゐと無れ信よき
むとるぐ血服よるるゝをるるを釈ゝ義民ゝをとゝ返

世姫　巻

家中れ且れ寺のれ尚までとりけゝ。ゐぐゝ傳云ゝて世宮
伝法をしていとゐの伝をゝゝゝゝ言るゝをを記ゐ釈ひ
をるゝ。ゐゐハ代をゝゝハ考ゝゝくとのてんがゝ口ゐ親の同よ
ゐるるよを深名れゝるゝ。縁の口れゐるとさハるひよを。
まゝゝ独さをゝくをゝるのひるぬ様ゝよんとハさゝて。
細眉ゝるゝをゐ粉濃るるけゝくゐゐ新のゐゝ相ゐハ伝れ釈よ
るゝと整約。二度るるれるゝて手ゐれ義金ゝて前ゝの祇を慢
ゐゝらハを大拠ゝよゝゝく美ゝるゝ国ゝを人縁の第ゐるゝる刺
下れ第の殿を。角様れ大拠様ゝゝて事ゐるゝ義伝ハるゝと
をるゝ。ちるゝよゐひまをゝゝと大事ゝを代ゝ奥をゝゐ。こら
乃ゐるるゝとゝふ食様ゝるひとゝハ。イヤサ。ゐれの妹姫のゐるよ

わつをくゝすれ。男ありつと二番とり夫婦の約束いうて。角
助とゆふちうが。まぶれいの侘方へやゝ嫁入いると実法でござ
ゝいうち矢白山かんまんいうてあるつとあり。おさんと服指ぬさ
せ。むつゝうかれ。書入り書入りとうとり。推手ふ方
とのれゝ。ゝかりかけゝゝ事ハあるそかりも
ゝ。ゝ。ゝ。

[illegible]

つけわき弐百匁あり〳〵て新造の初よりかまひるをとりよつれ
ぬ〳〵ひとり乃男ちく酒まで〻とりかへ〳〵ぬ同じ流れ
ひとり乃兄弟とりも姉とハかくなつりもまもそこをひそ
とくを親れ分で指ゞきてこるひとそ切くもそ〻れど嵐
間出入れりくちそ〻ゆ法をるとりひやくめげひやくれ戸桁
へよりあ〳〵せ〳〵ゞ敷ゞけ〳〵門乃手れ明毎ゞとりとあハ行事
を仕切まハせぬりと二親所をもやうくをてりりどゞ〳〵

世間娘形気三之巻　終

中人堂